

# 英文の読み方を考えるⅣ

## —要素の移動—

平井 正朗

### I はじめに

旧情報から新情報へという談話の流れのなかで文要素の移動を考える場合、文頭に前述内容との結束性を明示する旧情報が置かれ、左方移動によって主題化されるのに対し、情報価値の高い新情報は右方移動によって焦点化されるという特徴をもっている。

### II 左方移動

#### II-1 話題化

学校文法では、文のS以外の要素が文頭にくる場合、倒置として処理するのが通例であるが、生成文法では「話題化」と言う。代表的なタイプがOSVである。

(01) “Be nice to him,” my father said. “He’s your cousin, after all.”

“He takes my things.”

“Don’t be silly, Alan. What of yours could Blaze possibly want? He has everything ... *everything*,” my father added with a slight tone of disgust, for we all knew how my cousin always got anything he wanted.

① But he did take my things. ② *Not things he wanted* because he needed them, but little things like a seashell I’d saved and polished, an Indian head coin I’d found, a lucky stone shaped like a star. (電気通信大, 07)

[イタリック、番号は筆者、以下同様]  
 (“彼に優しくしてあげなさい” “結局、おまえのいところなのだから”と私の父は言った。“僕のものを取るんだ” “ばかなことを言うな、アラン。おまえの持っているものでブレイズがほしがるものがあるというのか?” “あの子はなんでも持っているのだ。なんでもだよ”と

父は少しうんざりした口調でつけ加えた。というのは、いとこが自分のほしいものをどのように手に入れていたか皆知っていたからだ。しかし、彼は確かに僕のものを取った。ほしから取ったのではなく、僕がとっておいて磨き上げた貝殻や僕が見つけたアメリカ先住民の頭部が描かれたコイン、星のような形をした幸運の石など、ちょっとしたものを取るのだ)

(01)はThe Green Killerと題する英文の冒頭部分である。父親の“ブレイズは何でも持っているのだからほしがるものなどない”という言説に①では逆接的關係を示すディスコース・マーカーであるButを用い、さらにdid takeと動詞を強調することで前言を否定している。また描出話法を用いることによって「私」の内的空間を描写している。②になるとNot things (O) he (S) wanted (V)と倒置することによって①のmy thingsとの結束性がより緊密になっている。

#### II-2 否定倒置

否定倒置とは、否定を表す副詞(句、節)が文頭に位置し、後続する形態としてSVが倒置されている文のことである。否定語句が前置されるこの構文は、文全体の真理値を否定する文否定が特徴である。

(02) Important as the interaction of science and technology is, the most essential part of the proposed approach could be its third aspect, the connection of these two with society. From global temperature change to technology applied at the atomic level, *rarely does a day go by* without some findings being announced that carry the potential to have a significant

impact on mankind. (京大, 07)

(科学と科学技術の相互作用は重要であるが、すでに提示したアプローチの最も本質的な部分は、その3番目の面、つまりこれらの2つと社会との結びつきであろう。地球規模の気温の変動から、原子レベルで応用される科学技術に至るまで、人類に重大な衝撃を与える可能性をもつ何らかの発見が発表されることなく一日が過ぎることはめったにない)

(02) は非明示的否定副詞 rarely が文頭に位置する例である。否定語が1語であるため、sense group をつかみやすいが、選択問題や正誤問題でケアレスミスを誘発しやすい。

(03) People had always found pleasant ways of diversion, of course, but *not until the appearance of mass society in the eighteenth century could popular culture*, as one now uses the term, *be said to exist*. (東京学芸大, 05)

(人々はいつも気晴らしの楽しい方法を見出してきたが、もちろん、18世紀になって大衆社会が出現して初めて、用語として現在、使用されるような意味での大衆文化が存在し得るようになったと言える)

(03) は not の後に副詞節 until ~ が後続し、文頭に位置した事例である。S + V + not + X + until ~ の not と until 節を併合し、文頭移動とともに強制倒置されたものと考えるとわかりやすい。not, never などが他の副詞(句・節)を伴って文頭に位置する否定倒置構文の構造を見落としがちなので、和訳のみならず、英作においても注意を要する。

### II-3 Tough 構文

to 不定詞内部の他動詞、もしくは前置詞の目的語となる要素が主語の位置にある S + be 動詞 + 形容詞 + to + 他動詞、もしくは自動詞 + 前置詞の構造をもつ文を「tough 構文」と呼ぶ。大学入試では、英文和訳としての出題が主流であるが、英作文における整序問題や語法選択問題としても頻度は高い。

(04) Internationally mixed organizations that are truly committed to success recognize that *cultural differences*, no

matter how small they seem at first glance, *are important to understand and to bridge*. (青山学院大, 05)

(本当に成功を目指す様々な国の人間が混じりあった組織は、一見どんなに小さく見えても、文化的な相違を理解し、橋渡しをするのに重要であることを認識している)

(04) の文構造は Internationally mixed organizations が S、続く that は関係代名詞であり、節の終点は success までになっている。関係代名詞によって導かれる形容詞節は、先行詞となる organizations を修飾しており、recognize が V、that 節が O である。that は接続詞として機能し、節内部構造には tough 構文が埋め込まれている。ここでは等位接続詞 and が to understand と to bridge を連結し、cultural differences が意味上の O になっているのがわかりにくいようである。

(05) If my clone were produced, *living in my shadow would be very difficult for him to stand*. (東北大, 07)

(もし私のクローンが作られたら、私の陰に隠れた生活に甘んじるのは、彼にはとても我慢しがたいものであろう)

(05) は仮定法過去が tough 構文に内在する事例である。「私は現在、クローンを作ることはできないが、もしできるとしたらそれは私の陰に隠れた生活をする事になり、そのようなことには我慢できないであろう」というニュアンスを読み取りたい。また、stand の意味上の目的語が living in my shadow であることを読み取れない事例が散見される。

### II-4 分裂文

文内部の名詞(句・節)、もしくは副詞(句・節)に焦点をあて、It is ~ that... の ~ 部分にその要素を埋め込んだ文のことである(「強調構文」とも呼ばれる)。that の他に who, which, when などを用いることもあるが、研究者によって見解が異なる。

(06) However, although ① *it is* indeed the poet *who* gives verbal form to his or her idea or vision, *it is* the reader *who* translates this verbal shape

into meaning and personal response. Reading is in reality a creative process affected by the attitudes, memories, and past reading experiences of each individual reader. ② *It is* this feature of reading *which* allows for the possibility of any poem having more than one interpretation. (東京大, 07)

(しかし、確かに自分の考えや視点に言葉で形を与えるのは詩人であるが、この言葉による形を意味や個人的な反応に換えるのは読者である。実際、読むことは、個々の読者の態度、記憶、過去の読書体験に影響される創造的なプロセスなのである。読むことにこのような特徴があるからこそ、どんな詩にも1つ以上の解釈がなされる可能性があるのである)

(06)の①では名詞 *the poet, the reader*, ②では *this feature* が焦点化された分裂文になっている。これらの名詞は、*gives, translates, allows* の意味上の主語になっている。分裂文において名詞(句・節)が焦点化される場合、*that* 節は名詞が欠落した「不完全な文」になることが見極めのポイントである。

(07) In other words, they assume that we talk about the weather because we have a keen interest in the subject. Most of them then try to figure out *what it is* about the English weather *that* is so fascinating. (熊本県立大, 06)  
(言い換えれば、我々が天候について語るのは、その話題に強い関心があるからだと仮定しているのである。それだから彼らのほとんどは、イギリスの天候の何がそんなに魅力的なのか解明しようとする)

(07)は *what* を焦点化した分裂文であり、間接疑問文になっている。5W1Hの直後に副詞句 *about the English weather* があるため *it is* と *that* の連鎖が見えず、誤訳の要因になっている。

### Ⅲ 右方移動

#### Ⅲ-1 外置

右方移動には、名詞句の一部を文末(方向)に置く

外置と呼ばれる言語現象があり、その代表的な形態が、同格節、関係詞節、前置詞句などの外置構文である。この場合、外置される節、もしくは句を含む名詞句の *sense group* が新情報の役割を担っているのが特徴である。

(08) If you contacted 100 people at this moment, *the likelihood* is great *that the vast majority of them would say leaders are more valuable than managers, or given the choice of hiring one or the other for their organization, they would choose a leader.* (関西学院大, 07)

(現在、100人の人と連絡をとったら、大多数はリーダーがマネージャーより貴重だと言うか、あるいは自分の組織にどちらかを雇用する選択権があるなら、リーダーを選ぶ可能性が高い)

(08)は *the likelihood* が *that* 節と同義関係にあるから *that* は、同格の名詞節を導く従位接続詞であるが、*that* 節内部にあった仮定法 *if* 節が左方移動していることに気づかないと誤訳の原因になる。

(09) This is a recent development, as big historical shifts go, but it already has a complex history. For *more* is involved *than the apparent simplicity of shopping and acquiring.*

(東京大, 04)

(大きな歴史的変遷としては、これは最近の展開であるが、それはすでに複雑な歴史を有している。というのは、買い物や物の取得という見かけの単純さ以上のものが含まれているからである)

比較級と呼応する *than* の解釈は、従位接続詞、関係代名詞と二義的であるが、(09)では *more than the apparent simplicity of shopping and acquiring* が分離したものと考えられる。

#### Ⅲ-2 重名詞句転移

右方移動には、関係詞節、前置詞句など、長くて“heavy”な語句に修飾された名詞句の一部を切り離し、後方にシフトさせる「重名詞句転移」という現象

がある。

(10) Birds, however, were not the only ones to develop complex vocal abilities. Many other animals also evolved to make use of singing as an important medium for communication and social togetherness. Chief among those species today are *whales that sing together, a small Asian ape that forms a vocal life-long partnership with its mate, and, of course, human beings.* (愛知教育大, 06)

(しかし、鳥は単に複雑な声を出す能力を発達させただけではない。他の多くの動物もまたコミュニケーションや社会的連帯感を生み出すための重要な手段として歌うという行動を通じて進化したのである。今日、存在する種族のうち主なものとしては、集団で歌うクジラ、声を使って一生配偶者と生活をする小型のアジア猿、そしてもちろん人間がいる)

(10)では形容詞 Chief が C、are が V、whales が S となり倒置されている。その結果、Chief が文頭で主題化され、whales が右方移動することによって焦点化されている。前文が「鳥やその他の多くの動物は“歌う”という行為をコミュニケーション手段だけでなく、連帯感を生み出すためにに行い、進化してきた」とあり、新情報となる要素「クジラ、猿、人間」を文末に移動させることによって前後の結束性をより緊密なものにしている。

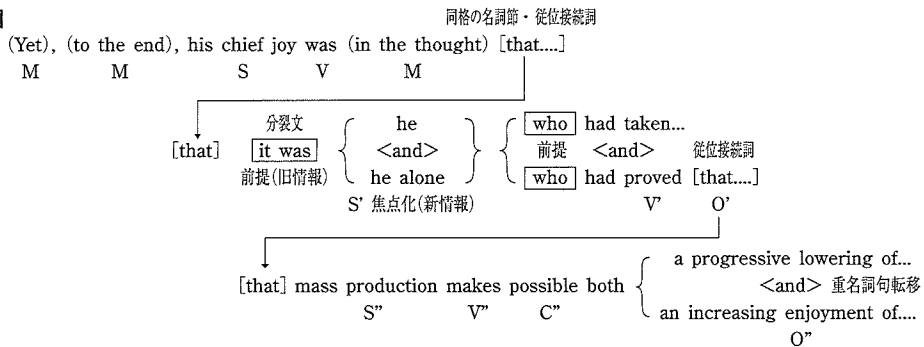
(11) Perhaps this was the reason why Henry Ford became more interested

in other things. He took up the production of farm tractors and airplanes, the building of museums, and the collecting of historical objects. Yet, to the end, his chief joy was in the thought that it was he—and he alone—who had taken American industrial manufacture to its highest point, and who had proved that mass production makes possible both a progressive lowering of manufacturing costs and an increasing enjoyment of life by all people. (関西大, 06)

(おそらく、これはヘンリー・フォードが他のことにさらに興味をもつようになった理由であった。彼は農場トラクターや飛行機、博物館の建設、そして歴史的なオブジェの収集まで手がけた。しかし、結局、彼の主な喜びは、彼が、いや彼こそが、アメリカの工業製品を最高の水準にまで押し上げ、大量生産によって、製造費削減を促進し、あらゆる人々が人生を大いに楽しむことを可能にしたことを証明したと考えていることだった)

(11)では、had proved の O となる that 節内部構造が make + C + O の倒置になっている。情報構造的にも「ヘンリー・フォードの興味・関心の対象が、米国の工業製品の向上につながり、さらにその大量生産が製造費削減と人生享受を可能にした」という文脈になっており、倒置によって文末焦点の法則が機能している。

(11)の構造図



(京都文教中・高等学校教諭)